Japanese Association of Russian Scholars

トルストイの宗教思想

原　　卓　　也

『わが信仰は何に存するか』でみずから述べているように，若い頃からニヒリストをもって任じていたトルストイは，動物的個我の欲求の満足を主たる目的とする生活にあきたらなくなり，50歳を迎えるや，キリスト教の真理にもとずく生き方をしようと志した。それ以前から福音書の中で彼の心を打っていたのは，(1)愛，(2)恭順，(3)謙虚，(4)自己犠牲，(5)悪に対して善で応える，の5点であった。彼にはこれがイエスの教えの本質と思われたのである。

しかし，自己を教会に従わせるようになってから，程なく彼は，自分にとって重要なこれらの本質を，教会の教義の中に発見できぬことに気づいた。正教教会に対して彼が幻滅した点は大きく言って次の3点である。

(1)　教会の教義そのものへの懐疑と幻滅。

(2)　機密，祈禱の遵守などについて教会の与える法の不必要性。

(3)　教会による世の悪の是認。

これらの点についてトルストイは次のように告白している。

「しかし，教会がわたしに与えてくれた掟は，わたしにとって大切なキリスト教的気分に近づけてくれぬばかりか，むしろ遠ざけてしまうようなものだった。だからわたしは従うことができなかった。わたしに必要であり大切であったのは，キリスト教の真実にもとずく生活であったのに，教会が与えてくれたのは，わたしに大切な真実にはまったく無縁な生活の掟だった。教義への信仰や，機密・精進・祈禱などの遵守について教会の与えてくれる掟は，わたしには必要なかった」(1)

さらに何よりもトルストイを困惑させたのは，他信仰に対する容赦ない批判，刑罰や戦争などの教会による是認であった。

教会の教えに対する疑問に苦しむトルストイは，『聖書』を精読し，教会の教義に見られる矛盾が，『旧約聖書』と『新約聖書』の間に存する食い違い，そして『旧約聖書』の教えに対するイエスの修正などに教会が目をとざしていることに由来しているのを発見する。理解を助けるため『旧約聖書』からモー

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

セの10戒を要約して紹介してみよう。

(1) あなたはわたしのほかに，なにものをも神としてはならない。

(2) あなたは自分のために，刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの，下は地にあるもの，また地の下の水の中にあるものの，どんな形をも造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。

(3) あなたは，あなたの神，主の名を，みだりに唱えてはならない。

(4) 安息日をおぼえて，これを聖とせよ。

(5) あなたの父と母を敬え。

(6) あなたは殺してはならない。

(7) あなたは姦淫してはならない。

(8) あなたは盗んではならない。

(9) あなたは隣人について偽証してはならない。

(10) あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻，しもべ，はしため，牛，ろば，またすべての隣人のものをむさぼってはならない。[2]

しかし，トルストイはモーセのこの契約の言葉にもかかわらず，『旧約聖書』の他の箇所に「妻をめとって処女の証拠が見られない時は，その女を父の家の入口にひき出し，町の人々は彼女を石で撃ち殺さねばならない」[3] とか，「もし処女である女が，人と婚約したのち，他の男が町の内でその女に会い，これを犯したならば，あなた方はその二人を町の門にひき出して，石で撃ち殺さなければならない。これはその女が町の内におりながら叫ばなかったからであり，またその男は隣人の妻をはずかしめたからである」[4] など，「殺してはならない」の戒めに正反対の教えを見いだして当惑する。あるいはまた，「姦淫してはならない」という戒めにもかかわらず，イサクの子ヤコブは母の兄ラバンの娘レアを妻とし，彼女と一週間をともにすごしたのち，その妹ラケルをもめとる。レアは子供を産んだが，ラケルはみごもらなかったので，彼女の仕え女ビルハをヤコブに与え，子供が二人できる。姉レアも，自分がもう子供を作れぬことを知り，仕え女ジルパをイサクに与えて二人の子を作る，[5] といったことが記述されているのに，トルストイは大きな矛盾を感ずるのである。そして彼は『教義神学の研究』の中で，次のように断ずる。

「……これら最初の数章の神はキリスト教の神ではない。予言者たちやモーセの神ですらなく，人々を愛する神ではない。これは人々に対する自己の権力を熱望し，人々を恐れる神である」[6]

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

『聖書』を熱心に研究したトルストイは，『旧約聖書』に見いだされるさまざまな矛盾が，『新約聖書』の中でイエスによって修正されていることを発見する。一例をあげよう。『旧約聖書』に次のような箇所がある。

「……もし人が互いに争って，みごもった女を撃ち，これに流産させるならば，ほかの害がなくとも，彼は必ずその女の夫の求める罰金を課せられ，裁判人の定める通りに支払わなければならない。しかし，ほかの害がある時は，命には命，目には目，歯には歯，手には手，足には足，焼き傷には焼き傷，傷には傷，打ち傷には打ち傷をもって償わなければならない」(7)

「目には目を」の報復を説いた有名な箇所であるが，これをイエスは次のように修正する。「目には目を，歯には歯をと言われていたことは，あなたがたの聞いているところである。しかし，わたしはあなたがたに言う。悪人に手向うな。もし，だれかがあなたの右の頬を打つなら，ほかの頬をも向けてやりなさい。あなたを訴えて，下着を取ろうとする者には，上着をも与えなさい」(8)

先まわりして言うなら，イエスの説くこの限りない赦しが，トルストイの無抵抗主義のいしずえとなるのであるが，イエスの教えの中に，いかに生きるべきかという問いに対する答えを見いだしたトルストイは，やがてみずから，詳細な注釈をほどこした尨大な労作『四福音書の統一と翻訳』，(9) 及びその姉妹篇ともいうべき『要約福音書』(10) を著わすにいたった。『四福音書の統一と翻訳』のまえがきでトルストイは，イエスの教えを信ずる人たちが，カトリック，プロテスタント，正教，分離派……と多くの派に分かれてしまった原因は，教会についての教えであるときわきつけ，必要なのはそれらすべての派が生ずるもとであった種子を知ることであり，そのためには福音書に記されたイエスの言葉と行動だけを忠実に拾いだして正しい福音書を編まねばならぬ，と述べている。また，この著作にひきつづいて完成させた『要約福音書』は注釈を取り除いたもので，やはり本文12章と序章から成り，トルストイ自身による解釈も当然のことながら，前作とほとんど同じであるが，自己のイエス観をより大胆に，より鮮明に打ちだしている箇所も少なくない。

ここで両作品の内容に立ち入って詳述する余裕はないが，『要約福音書』を一読すればわかるように，トルストイは，たとえば，マリヤが聖霊によってみごもったというイエス生誕のいきさつをはじめとして，カペナウムにおいてイエスの示したとされる数々の奇蹟や，海上の歩行，ガリラヤのカナにおける婚礼のエピソード，そして処刑されたあとのイエスの復活などといった箇所はことごとく削除している。トルストイによれば，こうした奇蹟や超自然的な行為

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

の記述は，イエスの教えそのものに対する解釈を複雑にするだけであり，イエスの神性を信じない人たちに，その不信を助長する役割をはたすにすぎないからである。彼のイエス観の根底にあったのが，いわゆる山上の教え「怒ってはならない。姦淫してはならない。いっさい誓ってはならない。悪人に手向ってはならない。敵を愛し，迫害する者のために祈れ」[11] であったことは，言うまでもないだろう。

ところで，トルストイの描いたこのイエス像は，フランスの宗教学者エルネスト・ルナンが『イエス伝』[12] で示したものと一見きわめて似かよっていると言ってよい。

『要約福音書』と異なり，ルナンの著作は学問的研究書である。ルナンは四福音書に記されているイエスの生活や言動がどの程度まで歴史的，現実的信憑性を持つかという考証から出発し，タルムード，ヘブル人による福音書，エジプト人による福音書，その他尨大な量にのぼる資料や研究書を参照して，キリスト教とよばれる一つの宗教の開祖者たる人物の生涯を克明に復元してみせた。彼が本書を執筆する一つの大きな契機となったのは，1860年と1861年に，古代フェニキアの探検を目的とする学術調査で，ガリラヤの国境をたびたび旅行し，福音書の地方を縦横に歩く機会を持ったことであった。それまで彼にとって抽象的なものであった歴史が，具体的な形をとってよみがえり，マタイやマルコの言葉を通して想像の世界に存在していたイエスという人物が，いきいきと活動する姿で彼に見えはじめた。ルナンは当時の諸民族間の政治・文化関係を詳細に整理，分析し，当時のイスラエルがいかにメシヤを熱望し，完全な革新を必要としていたかを論証する。そして，そうした歴史的必然性のもとで新しい世界，新しい宗教を創りだし，最後にはしかし，“宗教家”としてではなく，“国事犯”として処刑された若き革命家イエスの生涯を描いたのであった。イエスの伝記のはじまる第2章の冒頭を見れば，ルナンが，イエスの父ヨセフの属していた当時の職人階級がどの程度の生活を送っていたか，イエスが幼少の数年をすごしたナザレがどのような町であったかなどを歴史的資料にもとずいて描くことによって，いかに綿密に福音書の世界を復元しようと試みているかがわかるだろう。イエスを実在の宗教革命家として捉える立場をとるルナンは，当然のことながら，イエスから超自然的，神秘的要素をすべて取り去る。ただしルナンは，イエスのおこなったとされる奇蹟のうち，病気の治療にかかわるものは，かなりの程度まで事実と認めている。イエスのおこなう治療のうちでいちばん多いのは，祓い，すなわち悪鬼の追放である。悪鬼はあらゆ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

る人に乗り移り，その人たちを自己の意志に逆らって行動させるというのが，当時の一般的な考え方であった。また，癲癇や，精神上・神経上の疾患，聾唖などもこれと同様に説明されていた。こうした病人に向ってイエスが「黙れ，この人から出て行け」と叫ぶと，汚れた霊が病人から出て行って病気が回復するという箇所は，福音書にはしばしば出てくる。[13] トルストイがそうした箇所をすべて削除したのに対して，ルナンは病気治療のエピソードはかなりの程度まで残している。ルナンの解釈によれば，イエスは自己の精神力の強さを自分で承知していたから，みずから治癒力を持つと信じていたに違いないし，当時の民衆の知的レベルからすれば，それだけ強靱な精神力を有する人物の自信あふれる言動が効果を発揮して病気をなおし，民衆の間でそれが奇蹟と受けとられてもふしぎではなかったのである。

病気治癒や奇蹟に対する考え方に差異があるとはいえ，イエスを人間として描こうとした点で，トルストイとルナンはかなり近い距離に立っているように見えぬことはない。

だから，たとえば，ソビエトの研究家セミョーン・ポゾイスキーがその著書『レフ・トルストイの教会破門のいきさつに寄せて』の中で述べた，次のような言葉が生まれるである。

「ここでのトルストイの立場はルナンの立場に近いし，ルナンの著書『イエス伝』は彼の大きな関心を惹き起したものだった。イエスの人格と仕事には何一つ超自然的なものはなかったし，盲目的信仰を要求するようなものは何一つなかったという，このフランスの宗教史家，作家の見解に，彼は文句なしに共感していた……」[14]

ポゾイスキーがここで論拠としているのはトルストイの『2月20～22日付の宗務院の決定と，この件に関して小生の落手した書簡とに対する回答』であり，この論文でトルストイは次のように述べている。

「……わたしは信じているが，神の意志がいちばん明確にわかりやすく表現されているのは人間キリストの教えの内にであり，キリストを神として理解したり，キリストに祈ったりすることを，わたしは最大の冒瀆とみなしている……」[15]

しかし，ポゾイスキーのこの指摘は正しいとは言えない。たしかに，イエス・キリストを神として理解しないという点で二人の主張は一致している。だが，そのことは決してトルストイがルナンの見解に共感していたことを意味するものではない。むしろトルストイは，ルナンのイエス観にきわめて批判的で

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

あった。

1878年，彼はストラーホフへの書簡でルナンを手きびしく批判している。この書簡はかなり長いので，全文を紹介することはさし控えるが，批判の内容を要約すれば次のようなものとなろう。

「……キリスト教的真実とは，時間その他の形式を離れた本質そのものの表現である。それなのにルナン一派はその絶対的表現を歴史における表現と混同し，それを時間的なあらわれに帰した上で考察している……これらの歴史的ディテールからわたしはどんな新しいことを知り得ただろう？　何もない，まったく何もないのだ……美と真実と善とを理解する上で，環境をいかに研究しても役に立ちはしない……」[16]

ここには“人間イエス”に対する両者の考え方の違いがはっきりあらわれている。ルナンがあくまでも宗教革命家としてイエスを描こうとしたのに対し，トルストイにとってイエスとは，すべての人が理想と仰ぎ，それに近づくことを心がけねばならぬ“神の子”なのである。二人のこの違いを端的に示す具体的な一例として，荒野での悪魔の三つの誘惑の箇所を比較してみよう。『四福音書の統一と翻訳』ではトルストイもこの箇所を教会訳の福音書とほぼ同一の文章にしているが，[17]『要約福音書』では原典からまったく離れてしまう。[18] ここではもはや誘惑者たる悪魔すら登場せず，あくまでもイエス自身の内部の“肉の声”による誘惑であったという解釈をとり，肉と霊とのたたかいの結果，イエスが霊の力を知った，と述べている。

これとは対照的にルナンは，イエスの荒野滞在を公的活動の前の準備であると考える。そして当時は，民間信仰によれば荒野は悪魔の住居と考えられていたから，サタンの誘惑や，天使たちの助けなどはすべて，弟子たちの想像の産物であったと解釈している。[19] すなわち，ここでもルナンは，病気治癒の奇蹟に対するのと同様，当時の民衆の知的レベルによって説明しようと試みるのである。ルナンのこの解釈はきわめて現実的なものであり，ルナンのこうした見方に対するトルストイの批判は，そのまま彼の宗教観，信仰観に結びついている。

『要約福音書』でトルストイの描いたイエスは，荒野での40日の修行の間，肉の声の三つの誘惑にうちかったあと，自分自身にこう言う。

「わたしの父は肉ではなく，霊だ。わたしは霊によって生き，常に自己の内に霊を知り，霊のみをあがめ，霊にのみ報賞を期待して，霊のためにのみ働くのだ」[20]

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

ここでトルストイの言う霊とは，宗務院の決定に対する回答で彼自身が明言している通り，神にほかならない。トルストイにとって神とは霊であり，愛であり，すべてのはじまりであった。

そして，トルストイによれば，「信仰とは生命に与えられる意味であり，力と生命の方向を与えてくれるものである。生命ある人間は一人一人がこの意味を見いだし，それにもとずいて生きている」[21] のであった。だから，「信仰の教義はさまざまあっても，信仰は一つである。人間とは何か，どう生きねばならぬか，死後に何を期待すべきか，ということが信仰である」[22] ということなのであって，教会における聖書の解釈や，まして，奉神礼や祈禱などとは何のかかわりも持っておらず，人間の生き方を示すものにほかならない。

それならば，トルストイにとって宗教とはいったい何だったのか？　論文『宗教とは何か，その本質はどこにあるか？』で，彼は明確に言いきっている。

「理性的人間が，宗教なしに生きることができないのは，宗教だけが理性的人間に，何をしなければならないか，何を先にし，何を後にせねばならぬかという，必要な指針を与えてくれるからである」[23]

彼にとって宗教とは，神と人間との結びつきであり，無限なものに対する人間の関係を確立してくれるものであった。ここで彼の言う理性とは，世界に対する人々の関係を決する力を意味し，この理性を獲得した人間は時間的，空間的に無限な世界に対する態度を確立するのである。

トルストイにとって，イエスとはまさに真の意味における理性的人間であり，教会で神父の説くのとは異なる意味での“神の子”であった。だから，ルナンのように時代的，地理的考証を綿密に固めてゆく作業は，トルストイから見れば，それだけで無意味なことであったし，イエスの本質を見失なう徒労にほかならなかったのである。

イエス――トルストイにとってそれは，さまざまな奇蹟をおこなったり，十字架上から復活したりした神秘的な神人でもなければ，現実世界で新しい宗教確立のためにたたかって処刑された宗教革命家でもなかった。父なる神と人間との仲介者でもなかった。彼の考えるイエスは，すべての人と同じ意味における“神の子”であった。ただし，神の王国に入る資格ともいうべき理性的意識をそなえた存在であった。つまり，トルストイが『人生論』で示した真の生命に生きようとする人たちすべての，あるべき姿だったのである。トルストイが信じたのは，すべての人間が理性的意識を通して自己完成することによって万

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

人平等の世界を創りだす，脱教会のキリスト教であった。

「キリストの教えとは，すべての人に共通な至福への志向についての教えである」[24] とトルストイは言っている。

そして，人間にとっての幸福の条件として彼は次の5つをあげる。

(1) 人間と自然の結びつきが破壊されていないような生活。

(2) 好きな，自由な労働。食欲と，深い安らかな眠りをもたらす肉体労働。

(3) 家庭。

(4) 世間のあらゆる，さまざまな人たちとの自由な，愛にみちた関係。

(5) 健康と，病いによらぬ死。[25]

人間を幸福にするこれらの条件は，しかし，文明が発達するにつれ，また世間において人間が動物的個我の欲求の満足により多く生命の目的を見いだそうとするにつれ，確立することがむずかしくなり，イエスの教える至福から遠ざけてゆく性質を持つものである。

こう考えてくると，トルストイの宗教観やイエス観は，神学的，教会的な意味における宗教思想ではまったくなく，むしろ，人間の正しい生き方を説いた人生論，そしてさらには文明論として捉えるべきであることがわかってくる。

昨年のチェルノブイリの原発事故は，この語が“苦よもぎ”を意味するところから，われわれに『ヨハネ黙示録』を連想させずにはおかなかった。[26] この不幸な事故によって象徴的に示された核のおそろしさ，近代文明の副産物ともいうべき自然環境の破壊，天然資源の枯渇，さらには文字通り世紀末の病いとも言えるエイズの流行などで，人類の未来に重大な危機の感じられる20世紀末の現在，トルストイの宗教思想はきわめて現代的な意味をもってわれわれに真剣な考察を迫るのである。

注 トルストイの作品のテキストとしては90巻全集を用いた。注に示した巻数及びページ数は，同全集のものである。

(1) В чем моя вера? Полн. собр. соч., т. 23. стр. 308.

(2) 「出エジプト記」第20章3—17（日本聖書協会発行1962）。

(3) 「申命記」第22章20—21。

(4) 同上 23—24。

(5) 「創世記」第29章。

(6) Исследование догматического богословия. Полн. собр. соч., т. 23. стр. 139.

(7) 「出エジプト記」第21章22—25。

(8) 「マタイによる福音書」第5章38—40。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

(9) Соединение и перевод четырех Евангелий. Полн. собр.соч., т. 24.
(10) Краткое изложение Евангелия. Полн.собр. соч., т. 24.
(11) 「マタイによる福音書」第5章21—44。
(12) Ernest Renan : Vie de Jésus. Paris, Calman-Lévy, éditeurs. 1949. 1949.
「イエス伝」津田穣訳，岩波文庫，昭和50年。
「耶蘇」広瀬哲士訳，東京堂書店，大正13年。
(13) 「マルコによる福音書」第1章25ほか。
(14) Позойский С.: К истории отлучения Льва Толстого от церкви. Москва. "Советская Россия" 1979. стр. 108.
(15) Ответ на определение Синода от 20-22 февраля и на полученные мною по этому случаю письма. Полн. собр. соч., т. 34. стр. 251.
(16) Письмо к Н. Н. Страхову 17-18 апреля 1878 г. Полн. собр. соч. т. 62. стр. 412.
(17) Соединение и перевод четырех Евангелий. Полн. собр. соч., т. 24. стр. 61-64.
(18) Краткое изложение Евангелия. Полн. собр. соч. т. 24. стр. 820-821.
(19) 「イエス伝」津田穣訳。第7章。
(20) Краткое изложение Евангелия. Полн. собр. соч., т. 24. стр. 821.
(21) Церковь и государство. Полн. собр. соч., т. 23 стр. 475.
(22) О верах. Полн. собр. соч., т. 26 стр. 574.
(23) Что такое религия и в чем сущность ее? Полн.собр. соч., т. 35. стр. 159.
(24) В чем моя вера? Полн. собр. соч., т. 23 стр. 380.
(25) Там же. стр. 418.

Религиозные взгляды Л. Н. Толстого

Такуя ХАРА

Как известно, Л. Н. Толстой, когда ему минуло пятьдесят лет, начал сомневаться в своем образе жизни, цель которой заключалась прежде, как он говорил, в удовлетворении "требований животной личности", и пожелал вести правильную жизнь согласно христианской истине. Но, вскоре он заметил, что не может найти важные для него идеи учения Христа в церковных догматах. Он с большим вниманием и усердием перечитывал Библию и обнаружил, что Иисус в Новом завете исправляет разные противо-

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

речия, встречающиеся в Ветхом завете. Л. Н. Толстой решил написать "Соединение и перевод четырех Евангелий" и "Краткое изложение Евангелия". В этих трудах он изобразил Иисуса, не как мистического "Богочеловека", совершившего много чудес, а как простого "Божьего сына," лишенного всяких сверхъестественных качеств. Такой образ Иисуса на первый взгляд кажется очень похожим на Христа, изображенного Эрнестом Ренаном, французским религиозным мыслителем, в его книге "Жизнь Иисуса". Эрнест Ренан тоже освободил Иисуса от всяких мистических сверхъестественных качеств и показал его как религиозного революционера, посвятившего свою жизнь созданию новой религии, христианства. Однако, если подробно рассматривать труды этих двух философов, то нельзя не заметить коренное различие в ик взглядах.

В этой статье мы хотим сопоставить точки зрения Толстого и Ренана на образ Иисуса, и рассмотреть религиозную теорию Л. Н. Толстого и ее значение в современном мире.

NII-Electronic Library Service